

[成果情報名]アスパラガス半促成長期どり栽培における茎枯病の第一次伝染源に対する総合的防除対策

[要約]アスパラガス半促成長期どり栽培の茎枯病は、春芽萌芽前の地下部からの残茎の除去および地表部の残渣をバーナー焼却する耕種的防除と親茎への薬剤防除を組み合わせることにより長期間抑制できる。

[キーワード]アスパラガス、茎枯病、耕種的防除、残茎除去、残渣焼却、薬剤防除

[担当]長崎県農林技術開発センター・環境研究部門・病害虫研究室

[連絡先]電話 0957-26-3330

[区分]野菜

[分類]指導

[作成年度]2013 年度

[背景・ねらい]

アスパラガスの主要病害の一つである茎枯病は、ビニル被覆による雨よけを行う半促成長期どり栽培の導入により発生が減少した。しかし、2004 年頃から増加し始め、一部の圃場では大きな被害を与えている。本病は、罹病茎の残渣が翌年の第一次伝染源となり、萌芽時の若茎に感染する。親茎が感染した場合、夏秋どりの収量への影響が大きいため、立茎前および立茎時の防除対策が重要である。対策として地表部残渣のバーナー焼却、薬剤散布があるが、前年の発病程度が高い場合、十分な効果が得られない場合がある。そこで、本病に対する第一次伝染源防除を目的とした防除対策を検討する。

[成果の内容・特徴]

1. 春芽萌芽前に残茎を地下部から除去し、地表部の残渣をバーナー焼却する耕種的防除は、茎枯病を長期間抑制する（図 1、2、3）。
2. 耕種的防除（残茎の除去＋残渣の焼却）は、薬剤散布終了後に萌芽した茎に対する発病抑制効果も高い（図 2）。
3. 耕種的防除（残茎の除去＋残渣の焼却）に立茎期間中の薬剤防除を組み合わせることにより防除効果が高まる（図 2、4）。

[成果の活用面・留意点]

1. 茎枯病に対する防除体系を考える際の資料として活用できる。
2. 残茎の地下部からの除去は、抜き取りまたは地表面から約 3～5 cm 下（りん芽より上）を切取る。処理時期は、全刈後からバーナー焼却前までに行う。
3. 残茎の除去は、ハウスの両サイド等発生の多い場所を中心に行う。
4. 立茎時の薬剤防除は、浸透移行性のあるベンレート水和剤を 1 回目に散布し、その後 10 日間隔でベンレート水和剤以外の系統の異なる登録薬剤をローテーション散布（合計 4 回）する。薬液は、茎葉だけでなく立茎の株元（地下上部）もかかるように散布する。
5. 立茎後に発病した茎の除去は、本病の抑制に有効であるので見つけ次第処分する。

[具体的データ]

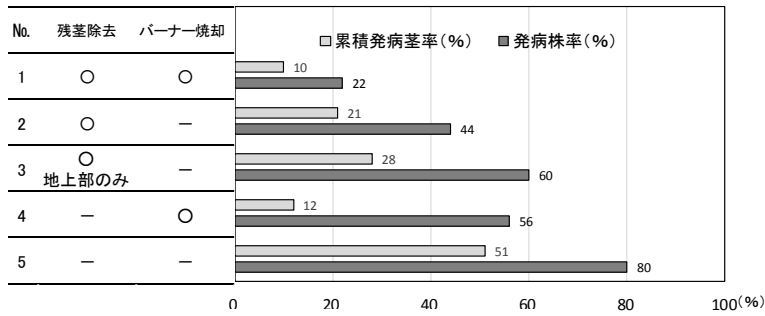


図1 耕種的防除の効果(ポット試験)

注1)試験場所：農技セ内ガラス室
 2)供試品種：ウエルカム（4年生株：
 1/5000a ワグネルポット）
 3)1区10株（前年発病株）
 4)立茎開始：2013/4/1
 5)調査期間：4/27～9/26
 ※ 発病茎は調査時に除去した

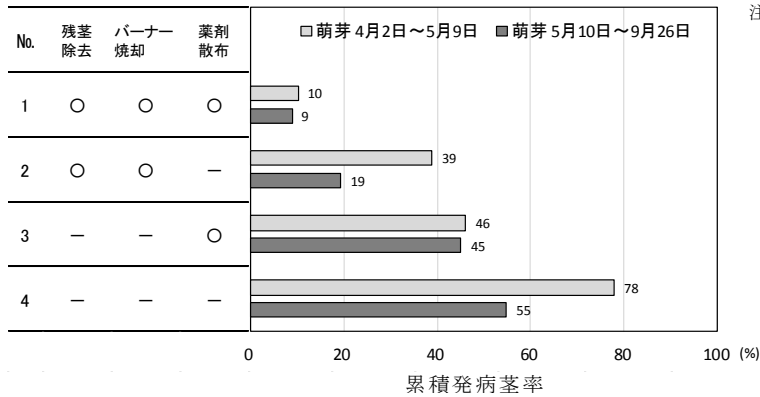


図2 耕種的防除および薬剤散布の防除効果(ポット試験)

注1)試験場所：農技セ内ガラス室
 2)供試品種：ウエルカム（3年生株：
 1/5000a ワグネルポット）
 3)1区18株（前年発病株）
 4)立茎開始：2012/4/2
 5)調査期間：4/2～9/26
 6)薬剤散布：4/10 ベンレート WP,
 4/19, 29, 5/9 ロブラル WP
 ※ 発病茎は、調査時に除去した

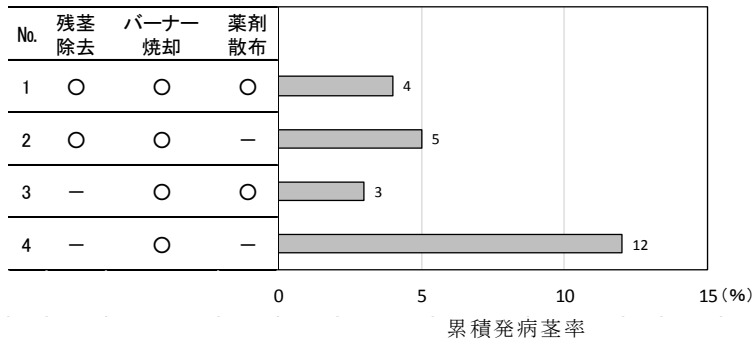


図3 残茎除去および薬剤散布の防除効果(圃場試験：現地)

注1)試験場所：現地農家ビニルハウス
 2)供試品種：ウエルカム（8年生株）
 3)前年発病状況：少発生
 4)立茎開始：2013/4/10
 5)調査期間：4/11～9/25
 6)薬剤散布：4/11 ベンレート WP, 4/20 ロブラル WP,
 5/1 コサト 3000, 5/11 タニコール 1000
 ※ 発病茎は調査時に除去した
 6月以降は全区農家慣行防除

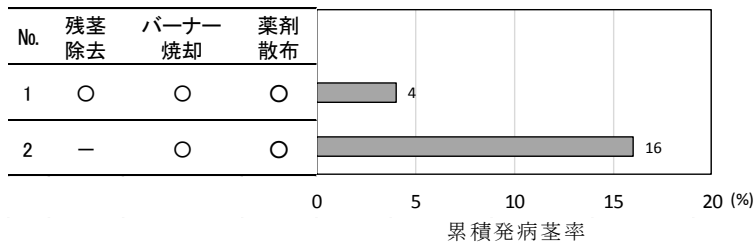


図4 総合的防除の効果(圃場試験：所内)

注1)試験場所：農技セ内ビニルハウス
 2)供試品種：ウエルカム（7年生株）
 3)前年発病状況：多発生
 4)立茎開始：2013/4/1
 5)調査期間：4/11～9/26
 6)薬剤散布：4/11 ベンレート WP, 4/20 ロブラル WP,
 4/30 コサト 3000, 5/10 タニコール 1000
 ※ 発病茎は調査時に除去した

[その他]

研究課題名：アスパラガス有望品種の栽培技術確立
 予算区分：県単
 研究期間：2009～2014年度
 研究担当者：難波信行、森 三紗